

## 暮らしを支える医療こそ一生の仕事

一関市国民健康保険藤沢病院事業管理者 佐藤 元美

### 数学者を夢みながらも医学の道へ

私はここ岩手県一関市藤沢町の隣の<sup>せんまや</sup>千厩町で農家の長男として生まれました。地元の小・中・高校に進学し、将来は数学者になりたいと思い描いていましたが、高校3年生の時に自治医科大学が創設されると、保健所長に「無医地区に生まれたのだし、受からなくてもいいから受験してみろ」と強く勧められました。このような背景があり、自治医科大学も受験することになったのですが、手応えのあった本命の大学には落ち、自治医科大学の方は合格することができました。本来であれば医学の道を志し第一志望の人間が集まる学部が医学部であるはずですが、私の場合、医学部は卒業まで6年間かかることを知ったのが入試に合格してからという位で、進学してから何度も中退したくなりました。ですが、医学部に入った以上は医療で人の役に立とう——。数学者になれなかった自分の気持ちを納得させたいという思いで医師としての道を歩み出したのでした。

自治医科大学は、卒後9年間は出身都道府県の指定する地域で医療に従事することが義務づけられており、私は卒後最初に岩手県立宮古病院に勤務しました。当時の宮古病院の内科は専門分化がされておらず、外来では高血圧や糖尿病といった生活習慣病の患者さんを多く診ながら、胃カメラや血管造影、気管支鏡などの検査も手掛け、内科全般の診療に従事しました。

宮古病院に6年間勤めた後、県からの要請で岩

手県立久慈病院に移りました。当時、久慈病院の内科は消化器内科のみでしたので、私は消化器以外の内科と救急を担当することになり、呼吸器と循環器を中心に血液疾患や膠原病なども診るようになりました。同時に宮古病院の院長に紹介いただいて、岩手医科大学内科学第三講座(現 内科学講座呼吸器・アレルギー・膠原病内科分野)に入局しました。岩手医科大学から循環器内科医を出していただくことができ、それから私は呼吸器をメインに担当するようになりました。

### 前後を放置する医療に生じた迷い

久慈病院はその頃から医師の数が増加し、設備も充実していきました。しかし、その頃私の心には医療を続けていくことに少しずつ迷いが生じていたのです。呼吸器疾患にかかる患者さんの大半は喫煙者です。さらに、ヘビースモーカーで肺癌になって手術を受けた方は、他の疾患で手術を受けた方に比べて予後が明らかに悪く弱っている。完治ができない疾患だからこそ医療の「前」の予防が重要であり、医療の「後」の福祉が必要なのではないかという思いが大きくなっていきました。そこへさらに追い打ちをかける出来事が起こったのです。

ある日、COPDが増悪を起し、チアノーゼを起している患者さんが救急搬送されてきました。意識がなく呼吸は今にも止まりそうでしたが、懸命の処置で何とか回復されました。しかし、退院を勧めても患者さんはそれを拒否し、「家族に患